富士山信仰に就いて

東京帝大史料編纂官
文學博士　井野邊茂雄

一

富士山信仰を觀察するには、充づ順序として富士山信仰史から入つて行く必要があらう。我々の民族祖先が大和盆地に本據を築いた時分にはまだ靈山富士に親みを持つ機會がなかつたのであつて、從つて富士山の名が文獻に現れるに至つたのは比較的後代のことである。富士に關する纒まつた記述としては恐らく和銅の常陸風土記が最初であらう。尤も神代の昔には經津主・武甕槌二神の東方經營があつて、なほ之に次いで、崇神天皇の御代には四道將軍の派遣があり、景行天皇の御代には、武内宿禰の東國巡視に續いて、日本武尊の東征が行はれてゐるから、それ等の機會に、畿内地方では見られない美しい山容を仰ぎ視て、驚異讃嘆せられたらう事は想像されるが、それは唯行きずりの觀察に止まつて、國民生活とはまだ直接交渉が無かつた。相當後代に書かれた風土記すら、「冬夏雪霜、冷寒重襲、人民不レ登」と云ふやうな冷やかな批評を下すに止まつてゐるのである。然るに其の後幾許もなく、萬葉歌人山部赤

人が出るに及んで、認識を異にし、其の美はしい山容を見ては、「駿河なる富士の高嶺は、見れど飽かぬかも」と感歎し、又、高く雲表に聳えて、噴煙を風に靡かせてゐる姿を見ては、「くすしくもいます神かも」と讃へ、或は「日の本の、やまとの國の、鎮めともいます神かも、寶ともなれる神かも」と崇敬の情を寄せた。要するに萬葉人の眼に映じた富士は、美しい山、懷しい山、くすしき山、神秘の山だつたのである。斯かる上代人の富士觀は、(一)我が國固有の神祇崇敬思想と結びついて、之を鎮國の大神とする信仰が起り、又(二)一方では支那の山林佛教思想とも結びついて、精神修養・心膽練磨の道場として此の山を擇ぶに至つたが、これが遂に、秀峰富士を宗教的な靈山としての存在に導いた原由である。そして(一)の思想からは、富士の大神、淺間の大神の信仰が生れ、(二)の思想は導かれて、山中の大日堂建立となり、又、登山して神秘なる山靈に觸れようとする道者の發生を促した。

此の富士の嶽神の名は、常陸風土記には福慈神とあるが、文德實錄に至つて初めて淺間大神の名が見え、それ以來アサマの神名が普及されてゐる。音讀してセンゲンと呼び習はすやうになつたのは、後に兩部思想と結びついた結果であつて、其の最初の所見は吾妻鏡に「仙間大菩薩」とあるものである。次いで南北朝時代の『詞林采葉抄』には富士權現、室町時代の『正廣日記』には富士淺間と列ねられてゐるが、これ等も亦佛教化の影響を語るものである。

次に初めて此の嶽神を祭つたのは、現大宮町鎮座の官幣大社、淺間神社の社記に據ると、富士山足の地に於てであつて、其の後之を富士郡の山宮に遷し、次いで平城天皇の大同年間、更に之を大宮の現地に遷したのであると云ふ。此の社傳が果して如何なる程度まで信憑すべきものであるかは問題であるが、古文獻の上では、文德實錄の仁壽三年の條に、社殿造營の記事が明らかに見えてゐる。それには只駿河とばかりあつて、地點は指示されてゐないが、併し之に次ぐ三代實錄の貞觀六年の條には、富士郡正三位淺間大神と共の鎮座の郡名を明記し、更に村上天皇の天曆年間に駿河守となつた平兼盛の歌集には、大宮の地點を記した詞書がついてゐる。何れにしても古い社であるには相違ない。此の大宮の淺間神社を初めとして共後、駿河國では、村山・須走・須山・御殿場、甲斐國では、八代郡一宮、南都留郡の上吉田・下吉田、河口・勝山等に、何れも淺間神社が建立され、江戸時代には五畿七道にまで共の分布が及んだ。

次に又富士の傳說としては、前に一言した和銅の常陸風土記に面白い話が出てゐる。それは、昔、祖神が巡行の際、福慈岳卽ち富士山に到つた時に日が暮れたので、一宿を求めた處が、福慈神は拒んだので、祖神は共無情を恨んで、どうして汝は自分の親に宿泊を拒むのか、そんな仕向をするなら、汝の山には、一年中雪を積らせて、一人の登山者もないやうにして遣るぞと詈り呪うた。それで富士山には常

に雪が絶えないで、人の登る者がないのである、と云ふのである。それに續いては役行者の修行傳說であつて、それは日本靈異記に出てゐる。更に其の次は都良香の富士山記に見えるものであつて、「貞觀十七年十一月十五日、吏民仍レ舊致レ祭。日加レ午、天甚美晴、仰觀山峰有二白衣美女二人一、雙二舞山巔上一、去レ嶺一尺餘、士人共見」と面白い奇蹟を傳へてゐる。そして之に續いて起つたのが『竹取物語』のかぐや姫傳說である。此の傳說は普及化されるに伴れて恰も事實存在した事の如くに考へられ、南北朝時代にはそれを立證せんとする試みさへ行はれた。又、聖德太子が富士に登られたといふ傳說もある。これは恐らく役行者登山說と同じ頃に成立したものであらう。其の傳に從ふと、太子は名馬に跨り、雪を凌ぎ、雲に浮んで頂上に到られたと云ふのであつて、此の事は、『上宮聖德太子傳補闕記』並に『聖德太子傳曆』に掲げられてゐる。補闕記は延喜十七年作、傳曆は更にそれ以前のものであつて、從つて此の話が一般に熟したのは、平安朝中期の事であらうと想像される。

斯かる富士山關係の傳說は、其の後年と共に次第に發展し、遂に史實化の過程を取つた關係上、駿河・甲斐二國の間には、聖德太子及び役行者の遺蹟を甚だ多く傳へてゐる。又、日蓮上人も登山して、法華經を吉田口五合五夕の地點に埋めたので、其處の名を經ヶ岳といふとか、其他空海・親鸞等についても甲駿二洲に登山說が傳へられてゐるが、これらは江戸時代に生れた口碑ではあるまいか。

二

現代の富士登山は信仰を離れたものであるが、昔の登山は決して物見遊山ではなく、嶽神の靈に觸れて精神上の糧を得んとする敬虔な行の現れであつた。文獻に依つて知られる富士登山の史的證跡は平安朝時代から見られるが、此の時代の末期には僧末代によつて山中に大日堂建立の擧があり、更に鎌倉時代を經て室町時代には、明かに嶽神信仰を以ての富士登山行者が現れてゐる。そこで、共れ等登山の行者を以て團體を組織し之を引率して登る所謂先達が各地に起り、又、それ等の登山團體に種々の便宜を與へ、之を宿泊せしめる道者坊が大宮・村山・須山・須走・河口・吉田等の各登山口に生れ、なほ登山の道者を相手とする關所が嶽麓各地に數多く設けられた。是等の事實を見ても當時如何に富士登山の風が盛であつたかゞ想像されるのである。富士道者の稱が初めて物に見えるのは、妙法寺記明應九年の條であるが、更に大宮淺間社の社傳記錄によると、大宮口の道者坊は既に享祿年間に存在してゐたことが知られ、又、多くの道者中には富士三十三度登山の立願をして、遂に共の願を滿した熱心な信仰家もあつた事が、吉田口五合目中宮社前の茶店に藏してゐる永祿三年在銘の懸鏡によつて知られるのである。次に富士先達の稱は、これ亦永祿の道者帳に見えてゐるが、なほ永祿十一年附の朱印狀にも、やはり先達の事が記されてゐる。無論富士道者、富士先達の事實上の存在はそれ以前であるに相違ないが、とに

かく富士信仰が形を具へるに至つたのは、明應から永祿あたりへかけての事と思はれる。併し、斯かる富士信仰の道者の集りが、次第に大を成して、目だつた發展を示すに至つたのは、江戸時代であつて、後には富士講と呼ばれる大きな講社として成形し、有名な水戸の會澤正志齋をして、其の偉大なる勢力に恐れを抱かしめるまでに發展したのである。富士登山の道者等が、便宜上一種の地方的宗教團體を組成して、先達の引率の下に多衆登山する風は、以上に述べた如く、既に室町時代に萠芽を發してゐるのであるが、立派に形を整へた宗教團體が出來たのは江戸時代に入つてからである。そして此の種宗教團體の中、京都聖護院門跡管理下の本山派修驗系統に屬したものは、富士行人・富士行家であり、本山派修驗とは獨立に別派の團體を組織したものが、卽ち右に述べた所の富士講である。

富士行人は、神變大菩薩卽ち役行者の行德を慕ひ、主として富士郡內から出て先達となり、駿河の村山口からする登山者を統率したものであるが、先達の稱呼は、村山三坊の修驗、卽ち池西坊・大鏡坊・辻ノ坊から附與し、行衣もやはり此の三坊から出したのであつて、其外又、三坊の修驗は此の村山口に鎭座の淺間神社にも別當として仕へ、聖護院門跡の配下として强威を持つてゐたので、室町時代から出仕の山伏と稱して社中の全權を握つてゐた。富士行人は卽ち富士登山行者の中で、是等三坊の修驗と師檀の關係を結び講仲間を造つた者を指すのであつて、其の講中も相當多かつたやうであるが、文獻に乏

しい。併し京都では行者講、大阪の浪花講・山上講、三河の岡崎講・三教講、遠江の金龍講、駿州の全瓶講の存在したことは明かに知られる。是等の講仲間は更に又幾つかの小講社に分れてゐたが、其何れも多くは修驗の先達によつて統率されてゐた。

次に富士行家と云ふのは、富士垢離行家の略稱である。これもやはり村山三坊から特に富士垢離を修した者に對し、聖護院門跡の名を以て許可したものである。これは、重に京都で行はれたもので、毎年五六月頃、加茂川原に小屋を營んで、其處で水垢離を取り、富士を遙拜して、家内安全、病氣平癒を祈るのである。さうすると、自分が現實に登山せずとも同一の效果があると信ぜられ、一時頗る盛を極めたもので、其の事は黒川道祐の『日次記事』や、『諸國年中行事大成』等にも記されてゐる。なほ別に富士代參も行はれ、それ等も富士行人と呼ばれたが、それには修驗もあり、又俗人もあつた。金本行家・銀行家・岩井行家・大黒行家・森住行家等は、斯かる富士行人の集團であつて、其他大阪にもあつたやうであるが判明しない。斯樣に富士行人といひ、富士行家といひ、何れも富士登山の信仰團體を成してゐたものであるが、併し特に其の仲間で成立した教理とか、教說とか云ふやうなものはなかつた。是等に比べて著しく宗教的又は道德的であつたのは、後に起つた富士講であつて、丸山教・實行教・扶桑教などの宗派神道、又、不二道といふが如き實踐道德を强調する道德團體の如きは、皆富士講の中から發

生したものである。

三

富士講は、角行といふ行者の流を汲む富士信仰の宗教集團である。角行は肥前長崎生れの人で、長谷川竹松といふのが其の本名である。早くから修驗道を學んで富士信仰の生活に入り、主として富士山中を修行地に擇んで、百日百夜の斷食修行、七日間不眠の修行、四寸四方角の木片上に爪立する修行など、到底普通人には出來ない苦行を積んで、一心に淺間大菩薩の擁護を求めたのであつて、角行といふ行名も、其の四寸角の木片上に爪立する苦行をした事から出てゐると云はれる。ところが其の數々の苦行の結果、遂に日月の行道、陰陽の和合によつて萬物の生育する所以、並に斯かる働きを掌るものが淺間大菩薩であることの靈覺を得、教の基礎を築いた。それが抑〻富士講の根元である。乃ち富士講の仲間では、此の角行を仰いで第一世と立て、以下二世日旺・三世旺心・四世月旺といふ風に續いてゐるが、四世月旺の時、門下に月行・月心の二人が出て、玆に世代は二派に分れ、月行からは身祿、月心の門からは光清が出て、世に身祿派・光清派と呼ばれた。富士講が發達したのは、此の分派が行はれて以後の事である。

身祿は別に行名を食行と稱へる。俗名は伊藤伊兵衞で、伊勢國一志郡清水村の生れである。江戸に出

て初は藥種商を營み、非常に成功して巨富を蓄へた。一說には太物商・油問屋を兼ねてゐたとも云はれる。ところが月行に就いて信仰生活に導かれるに及んで、金銀財寶の如きは、さまでに尊いものではない、人として尊いものは眞心である、故に自分は此の難有い富士信仰を以て衆生を濟度しなければならぬ、と一大決心をして、財產全部を手代以下の者に頒ち與へ、自らは油の行商をして貧しい生活を送りつゝ、熱心に道を說き、敎を弘めた。伊藤食行其後の生活が、如何に慘澹たる窮苦を極めたものであるかは、吉田口あたりの口碑に、貧乏身祿の名が殘つてゐる事でも想像される。併し人物としては相當優れた所があつたらしく、武家邸にも出入して、其方の信者もあつた。早くから富士山中入定の志があつたが、享保十八年六十三歲の夏に登山し、吉田口七合目烏帽子岩の所を其場所に擇んで、六月十三日から斷食行に入り、其時介添役となつた吉田口の御師田邊十郎右衞門に三十一日間日每に敎を說いた後、七月十三日を以て入定の目的を達した。遺體は今もなほ其の烏帽子岩附近、七合五夕の地點に埋められてあるが、江戶本鄕駒込の海藏寺といふ禪宗寺は、身祿の檀那寺であつたので、後に供養塔が建てられ、又、其の木像も安置せられた。又、三十一日の斷食行の傍、每日田邊十郎右衞門に說いた敎を筆記したものは、三十一日の卷として田邊氏遺族の間に傳はり、筆寫によつて世上に頒布せられたが、これは三田村鳶魚氏の手で校訂せられて、國書刊行會發行の信仰叢書に『不二行者食行錄』の名で收錄せら

れてゐる。富士講は此の身祿の時から盛になつたので、其の門流では之を中興の祖、又、元祖とも呼んでゐる。

更に身祿派門流の傳ふる所によると、身祿は神儒佛三道に通じ、文武の兩道に達し、醫術の心得もあつたやうに言はれてゐるが、文獻によるとやはり一個無學の行者に過ぎなかつたらしい。但し海藏寺の檀家として住職の法話は屢〻聽聞したといふから、禪學の素養は多少あつたものと觀てよからう。門人には關宿の藩士小泉文六郎、板橋の長田長四郎、吉田の田邊十郎右衞門、江戸の武家らしい岩田小太郎、江戸高田八幡の境内に模造富士山を築いた高田村の藤四郎等があつて、それぞれ皆講仲間を作つて教を說いたが、中でも吉田口の田邊十郎右衞門は、御師であつて、勢力も强かつた關係上、其の流派に屬する講社の數は可なり多くあつた。後に擡頭した丸山教も其の一分派であつた。併し身祿の正統を繼いだ者は、娘お花の門流であつた。身祿には男子がなく、三人の娘があつたが、長女の事は不明、二女は柳澤家の黑木某に、三女は旗本の小笠原權九郎信安に嫁した。此の三女が卽ちお花である。斯く娘二人が何れも武家と婚姻してゐるのを見ても、身祿の社會的位置の高かつたことが想像されるが、此の三女のお花が父と別れた時は僅に七歲の幼年だつたにも拘らず教に關する一切の書類を讓られたと傳へられてゐる所を見ると、當時既に將來を囑望されるに足る宗教家的素質の閃きを見せてゐたのであらう。

夫の死後、父の志を繼いで教化に力め、其の德行を知られた。寛政元年に六十一歳で歿したが、其の墓は海藏寺にある。此のお花の門人が伊藤參行であつて、其の門下から小谷三志を出し、爾來道統を嗣いで今日に至つたものが、現在の實行教である。

身祿派に對する光清派が月旺の門人月心から出た事は前にも述べた通りである。月心は、俗名村上七左衞門と云つて、寛永五年に歿してゐるが、光清といふのは卽ち其の子三郎右衞門の事である。江戸の商人で、御金御用を勤めたとも、又、葛籠屋であつたとも云はれ、判然しないが、相當の資產家であつた事は、吉田口淺間神社建立の大願を發し、遂に其の目的を達した事によつても知られる。現存の吉田口淺間神社の本殿・拜殿は、何れも此の時に大修繕を加へて面目を一新したもの、又攝末社其他の附屬建設物は此時の改築である。吉田口では貧乏身祿に對して、此人を大名光清と呼んだといふ口碑が殘つてゐるが、何にしても大した威勢であつたに相違ない。歿したのは寶曆九年である。巨費を擁してゐただけに、光清派の存在は俗世間的に身祿派を凌駕したが、特に優れた教も說かず、又門流にも人が無かつたので、死後には勢力が次第に衰へ、後世富士講と云へば皆、身祿派を指すに至つた。

四

富士講と稱するものが、明確にいつ結成されたかといふ事は分らない。前にも屢〻述べた通り、先達

によつて統率せられる富士道者の團體が、室町時代既に諸國に存在したのであるから、富士講も實質的には相當早くから成立してゐたらうと想はれるが、其の文獻を缺いてゐる。傳へられる所に據ると、三世旺心の時に一社を結び、掟を定めたとの事であるが、實際の講中成立は、身祿とか光清とか有力な行者が出て後の事であらう。光清の吉田淺間社造營は、光清中心の講中の成立を前提とするものと想像せられ、同時に身祿も亦同樣に講仲間を持つてゐたものと考へられるが、併しまだ富士講とは云つてゐない。身祿の歿後に至つて、門人高田の藤四郎が、元文元年に身祿同行を作つた。これが文獻に見える富士講關係の結社の最初のものである。又明かに講社の名が記されてゐるものは、『富士信心免卷』といふものゝ奥識に、「寶曆七年七月二十六日、信心講頭中山三郎兵衞」の署名があるのが初であつて、これで寶曆の當時、信心講といふ富士道者の團體のあつたことが知られるのである。續いて安永四年には山吉講、同五年には一山講の存在したことが、富士北口記錄に見え、又、安永八年には、身祿講のあつた事が、江戸高田八幡境内淺間社の前の手水鉢の銘記によつて知られる。乃ち以上の事實によつて、富士信仰關係講社の勃興は、寶曆から明和・安永頃と推測されるのであつて、丸山講の成立も寶曆年間と傳へられてゐるが、併しまだ富士講の名稱は現れてゐない。

そこで富士講の名は、いつ頃から見られるかといふ事を踏込んで調べて見ると、曳尾庵の『我衣』に

は富士講と稱するものが天明の初頃から流行したと記され、又、寛政七年正月の町觸には、初めて富士講の名が見えてゐる。是等が富士講の名の物に見えてゐる初めである。事實としての結社は勿論それ以前に見られるのであらうが、明かに立證されるのは此の時以來で、その後に加速度を以て一般化されたのである。

富士講は、本講と枝講とに分れる。枝とは分岐を意味する。今でも東京澁谷道玄坂の山吉講は有名であるが、これが山吉玉川講、山吉十七夜講と幾つかに分れて、本支の關係を成してゐる。講の統治機關は普通に講元・先達・世話人の三つに分れる。講元は講の主宰者として財政上の全權を握り、資金調達上の責任を一身に負擔する者であるから、特に其の人選に注意し、德望ある資產家が其の任に當つた。次に先達は專ら信仰方面の事を掌る者で、平素は講中信者の爲に加持祈禱を行ひ、登山期には講中を率ゐて登山の世話をやく者である。これは甚だ骨の折れる役目であるだけに、講中の信望篤く、養子緣組のやうな事の相談にまでも與る習慣であつた。世に富士行者と云ふのは、此の先達の事である。又、世話人といふのは庶務係であつて、從つて事務的才能の優れた者が選ばれるのである。卽ち講社は是等三種の役員によつて率ゐられてゐるのであつて、其の統率下に屬する一般富士道者が普通に講中と呼ばれたものである。

講中は毎月積金を拂込む。此の金が講の維持費となり、又、登山費ともなるのであるが、登山の人數には財政上から制限があるので、抽籤で參加者を決定した。登山の序には、相州の大山、江島・鎌倉等に參詣する事もある上に、大きな講社では、其の威勢を示す爲に、道中は勿論、宿に着く時にも、又、出發する時にも、登山の時にも撒錢をしたので、普通の登山費用以外に中々多くの費用を要したものである。澁谷の山吉講などは一度の登山に五十兩を費したと傳へられてゐる。

登山の經由路は、角行・身祿などが皆吉田口から登つたといふので、其の先蹤を追うて、やはり吉田口から登るのが原則になつてゐる。時季としては、室町時代には、大體五六月頃ならいつでも可かつたやうであるが、江戸時代には六月一日が山開き、七月二十七日には山仕舞といふのが定習であつた。最も登山道者で賑ふのは特に庚申の年であつて、登山期ともなると、岳麓地方の各淺間社は一齊に大祭を執行し、山中のお堂といふお堂は皆開帳して詣拜者を招いたものである。そして平年は原則として女人禁制で、婦人の登山を拒否したものであるが、此の年に限つて例外的に其の禁を解く事にしたので、尙更繁昌した。これは孝安天皇九十二年庚申の歳に、富士山が初めて出現したといふ傳說に基いて、其の年を記念する爲の大祭だと云ふ事である。

五

次には富士講の教の内容に入つて述べる必要がある。富士講に於て經典として尊重されるのは「御身貫（オミヌキ）」と「御傳（オツタヘ）」とである。御身貫と云ふのは神佛一體、陰陽和合の意味を現す宇宙萬物の本源が淺間大菩薩にあると云ふ事の禮讃の言葉であつて、別に之を御神語とも稱する。此の御身貫は、角行・身祿・光清それぞれのものがあつて、文句も多少異なつてゐるが、前にも述べた如く、富士講では身祿派が最も勢力ある關係上、最も身祿の御身貫が尊重され、講中は皆、其の文句を書いたものを表裝して掲げて、毎日自宅で之に向つて禮拜するのである。但し其の文句は角行が仙元大菩薩から授かつたいふ特殊の異字で表現されてあるので、門外漢には其の文意が了解できない。次に「御傳へ」といふのは、右に述べた御身貫を初めとして、角行の傳へた拜みの詞、身祿の遺した道歌等を記したもので、これは小形の折本仕立になつて居り、吉田の御師が署名して出してゐる。富士講の人々は之を恰も經文の如く神聖視し又尊重したものである。

例月の祭日とも云ふべきものは、三日・十三日・十七日・二十六日で、富士講では之を御式日又は御四箇日と稱して、御身貫の前に、餅・酒などを供へ、一同で通夜をし乍ら、御傳の中の身祿の道歌を誦み上げる習はしである。之を御歌揚と稱する。

行事として最も重要なものが登山であることは云ふまでもないが、平素は加持祈禱をして、病氣の平

癒・家内の安全を願ふ事が重要視された。其の時には御身貫の御神語を一同で唱へ、又御傳を以て患部を撫でるのである。其の外、御歌揚をする事もあり、焚上げ・摘み・御ふせぎなどいふ方法に據る事もある。又、護符も頒布する。摘みとはどんな事をするのかよく分らないが、焚上は線香や護摩を焚いて吉凶を卜し、或は安泰を祈る作法である。これには薪、藁などを用ゐてするのである。次に御ふせぎといふのは、病疫を防ぐ意味で、初めは祈禱の文句を書いた紙を授けたものであるが、後には特定の「參」の字を幾つも刷り込んだ護符を吉田口、須走口等の御師から出した。之を一字づゝ小さく切つて水に浮かして病人に呑ませるのである。さて是等は登山期以外の先達の仕事であつて、江戸時代の一般民衆が富士講に盛に入つた動機は、主として此の方面にあつたらしく想はれるが、併し富士講が一世に勢力を持つに至つたのは、必ずしも其ればかりではなく、もつと進んだ意味での宗教的道徳的導因が存したのである。そこで次には、富士講の教には、どんなものがあつたかを考察して見る必要がある。

富士講の教は角行から初まつてゐるが、角行自身のものは傳はつてゐない。後代元祿前後に門流の書いた「御大行の卷」とか「行體の卷」とか云ふ傳記の中に斷片的なものが散見するだけである。今それ等を拾ひ上げて假に體系づけて見ると、富士は天地開闢の初に成つたもので、我が日本領土の柱、萬物の根元である。そして其の山靈は仙元（淺間）大菩薩である。之を信仰すれば天下泰平、國家の安全を

期し得られ、又、一身一家の幸福を招くことも出來るといふのが、角行の主張の要點であつたらしい。ところが第三世旺心が、講中を結ぶ時に至つて新に三ヶ條の掟を定めた。第一には「よき事をすればよし、惡しき事をすればわろし」、第二には「かせげば富貴にして、病なく命長し」、第三には「なまければ貧になり、病あり。命短し」といふのであるが、これとても教理といふには未だしいものであつて、教理らしいものが出來たのは身祿以後である。それには身祿自身のもあるが、又、其の門人の書いたものもあつて、富士講の記錄時代は共れから開展して行つてゐるのである。

先づ身祿自身の書いたものには、『三光の卷』『一字不說の卷』があり、門人筆受のものには前述田邊十郎右衞門の『三十一日の卷』其の他小泉文六郎の覺書などがある。右の中で一字不說の卷は大したものでないが、共他の物には富士講の教理を幾分か含んでゐる。卽ちそれに據ると、富士山神は仙元大菩薩であつて、天地開闢の初に、日月と共に出現され、それから天下萬物が發生した、日月の行道は此の大菩薩の掌り給ふ所であつて、我々の日常食する米も其の授け給うた物であり、人間も其の御胤である、日月がなければ萬物が育たず、米がなければ人間は生存が出來ないのであるから、仙元大菩薩の厚恩は報じ盡し難いものである、然るに斯かる御恩を受けて人間として生れながら、無道にして邪を行ふ者があるのは歎かはしい事である、故に士農工商共に業を勵み、誠の心を以て世の中に盡すやうにせ

よ、と云ふのであつて、此の「誠の心を以て世の中に盡せ」といふのが、身祿の敎の中心である。そこで身祿は、忠孝を尊び、正直・慈悲・情の三德を致すべきことを强調し、なほ殊に忠孝の二つの最も尊重すべきことを說いて、如何なる場合にも、君親を恨んではならない、又、他人に褒められようと思つて忠孝を盡すのは間違である、眞心から出た行ひでなければ眞の忠孝ではない、と述べてゐる。

身祿は又、士農工商といふ階級的な差別觀を肯定してゐるが、それと同時に人間としての價値は同等であることを認め、更に又、夫婦の別はあるが、男女は同等であるといふ見解に立つてゐる。從つて人身賣買の惡德であることを論じて、遊女の存在を否定し、又、蓄妾する者を色慾の奴隸として排斥してゐる。なほ又、單なる娛樂の爲に殺生する事、名聞の爲神社佛閣に金品を寄進する事をも不可とし、如何に貧窮してゐても、誠の心を盡す者は尊く、富貴であつても、誠の心が無い者は尊重するに足らないとしてゐる。如何に身祿が眞心を以て世の中に盡すべき事の力說に主張の重點を置いてゐたかゞ知られるのである。

身祿は又、天の三光・地の三光といふことを唱へてゐる。天の三光とは日月星を指し、地の三光とは、天子・將軍・主親の三であるが、卽ち身祿は、天の三光があればこそ、萬物は生育するのであるから、我々日夕共の高恩に浴してゐる者は無限の感謝を捧げなければならぬと說き、又、地の三光とし

て、上に皇室がましませばこそ、國家は安全なるを得るのであり、將軍が朝命を受けて取締つてゐればこそ社會の平和が保たれ、主人があればこそ一家眷族を養ふことが出來、兩親があればこそ我身といふものがあるのであるとして、國體を讃美し、將軍の德を頌へ、主親の重んずべきことを說いて、斯く天地の三光の諸恩によつて、初めて我々は此の世に生を享け、平和の生活に安んずることが出來てゐるのであるから、此の恩を忘れてはならない、故に天の三光の本體たる仙元大菩薩を尊敬し、又其の御心に基いて、天子・將軍・主親を大切にせよと云ふ所に、其の最後の結論を導いてゐるのである。

要するに身祿の敎は、仙元大菩薩への報恩といふ事から出發して、至誠の心を以て公に盡すことが其の主眼點であつて、其至誠心は、忠孝・正直・慈悲・情として表現せらるべきことが指示せられ、其の所說は極めて平易なる實踐道德であつた。而も甚だ微溫的ながらも尊王の思想に觸れ、又、當代の社會制度に觸れて論じてゐるのは、德川幕府時代にあつては、注目すべき態度であつて、仙元大菩薩は富士の御山であり、富士の御山は世界の大根元であるから、報恩の志ある者は、一度は必ず登山すべきものであるとし、富士登山を以て單なる物見遊山でなく、厚恩ある神靈に見えて、報謝の意を通ずると共に、其の利生によつて、誠の人間となることを、富士信仰の中心思想と立てた所に、大きな宗敎的・道德的精神の特色が認められるのである。

賦得勅題　田家雪

酒井爲太郎

旭日曈々雪後天　山村田舍祝豐年
誰知禁裏農耕事　先捧皇恩海岳篇

昭和丁丑一月一條公爵隨行
袋田登月居山

老脚踏霜峻坂攀　寒林櫻樹俟春閑
名君碑石存巖上　遺德千秋月居山

田家雪

橋本貞夫

東風萬里大平春　普浴皇恩迎歲新
銀雪玉堆山野景　穰年瑞兆慰憂貧